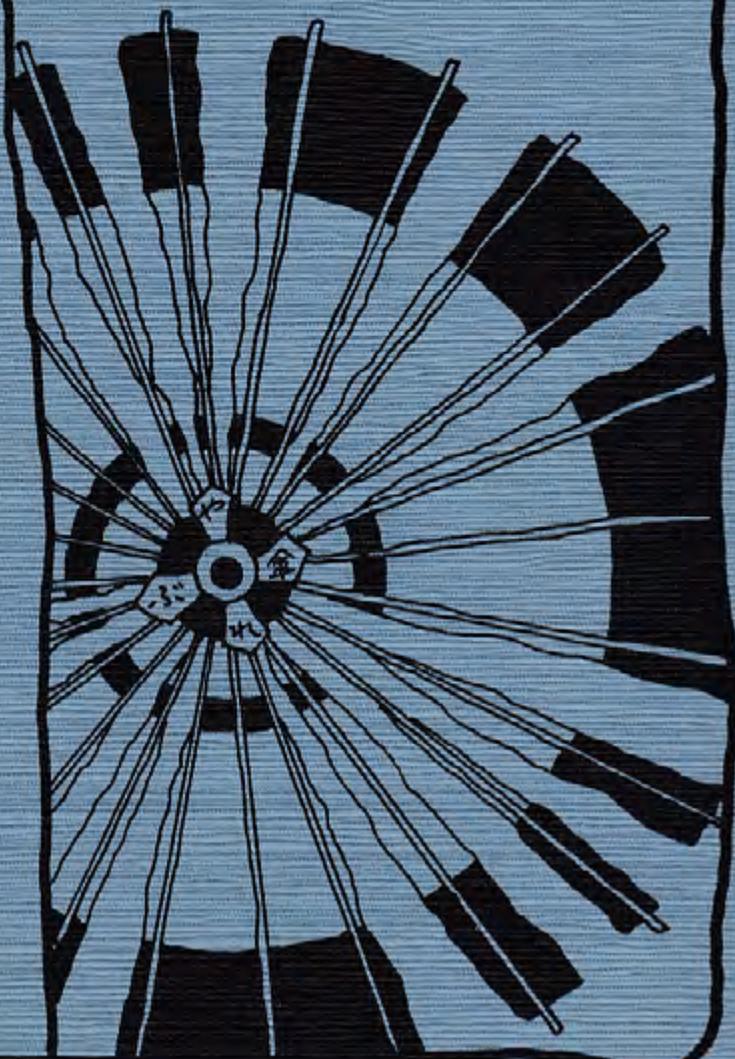


やぶれ傘



一〇三号
二〇一八年八月

古書店の奥の帳場に金魚玉 根橋宏次

あを過ぎる空に目高を見失ふ きくちきみえ

手掬ひに水を飲むとき蛇莓 青谷小枝

マチネーの切符がとどくパリー祭 大島英昭

三本のホームがら空き夏の夜 丑久保 勲

雀来て暮るる風来てねこじやらし 廣瀬雅男

柵つなぐ鎖は錆びて竹落葉 瀬島酒望

頂は雲の中なり山椒魚 天野美登里

入浴中守宮は窓に息づいて 安藤久美子

夕凧の浜に砂山作り置き 渡邊孝彦

昼の雷むかひの窓に灯がともる 藤井美晴

農道に電柱並ぶ麦の秋 白石正躬

追ひ込みの騎手の一鞭花柘榴 有賀昌子

蟻んこを弾けば死んでしまひけり 小山唄枝

旅客機のいつか遠のく夏の雲 秋山信行

抄 集 句 傘 れ ぶ や
夫 選 夫 紀 大 崎

二の腕のきらきら光る夏来たる 松村光典

大小屋の上に褪せたる麦わら帽 倉澤節子

朝採りの茄子と胡瓜の日曜日 黒木東吾

墓所までを先へ先へと夏の蝶 齋藤朋子

肩越しにつり銭渡す植木市 佐々木あつ子

青葉風杳ぬぎ石に座り込む 篠崎志津子

菌をそめる烏賊墨カレー梅雨曇 貫井照子

車椅子を押して行く人麦の秋 萩原久代

坂下る睡蓮の咲く池見えて 森美佐子

インド綿肌にさらりと更衣 山本久枝

花栗や卓にうつ伏すアルバイト 安齋正蔵

古家の建て替へられて花石榴 泉 一九

日の暮れの河原にほのと月見草 稲田延子

夏の水さぶさぶ使ふ幸せも 岩藤礼子

墓を買ふ話煮詰まる炎天下 上林富子

生垣のすきま切れ間に灸花
 梅雨の月キャリーケースの音たてて
 緑蔭に鍵ついでいてゐる投句箱
 夏帽子飛んで踏切音が鳴る
 綿菓子少ししぼんで熱き夜
 サドルなき放置自転車日の盛
 犬小屋の上に褪せたる麦わら帽

倉澤節子

日本画のやうな庭園走り梅雨
 築山に萌ゆる臯月や小糠雨
 葎切のしきりに騒ぐ休耕田
 洗濯機三回使ふ梅雨晴間
 朝採りの茄子と胡瓜の日曜日
 農道のところどころの草刈られ
 戻り梅雨社務所の巫女の長電話

黒木東吾

黒澤次郎

散策路変へて出くはす花栢榴
南天の花こぼれ散る朝を掃く
あすなるの地を這ふ下枝夏座敷
花穂に触れやつぱりこれは小糠草
用水の水嵩増せり夏つばめ
半分はみそ汁の具に冷奴
野茨の咲くあたりまで草の道

小池一司

公園で午睡の工事関係者
蠅虎猫と廊下で睨み合ふ
小流れを覆ひつくして鴨足草
瀧を落ち灌へ流るる水の青
呼び出され月下美人を見せらる
各々の菜園にある茄子の花
何処までも船につき来る夜光虫

小卷若菜

はつなつの窓赤く染め夜が明ける
微睡みて父に会ひけり初夏の風
母の日や小さき包みがテーブルに
髪洗ふひとりの自由な時の中
雨あがりピシクの空を見せて夏至
葛若葉パスタの店は準備中
峠越えて笹百合に逢ひひと休み

齋藤朋子

麦の秋遠山に日の沈みけり
赤松の幹つやつやと梅雨晴間
扁額は隸書体なる梅雨の寺
さざ波のやうに風来る植田かな
御殿坂上りて寺の青すすき
墓所までを先へ先へと夏の蝶
朝の雷俄か新聞休刊日

決めかねてまたひとめぐり植木市
肩越しにつり銭渡す植木市
夏に入る屋根に屋根ある能楽堂
銀座発夕焼線で帰るか
喉元へつるりと転(まる)ぶゼリー菓子
彩りにチェリートマトの曲げ輪つぱ
露天湯に蚊帳吊りはひる峡の宿

佐々木あつ子

梅雨晴れや年に一度の母の会
さくらんぼの真つ赤を選ぶ三十分
線路沿ひに歩くひと駅月見草
道順の矢印を往くお花畑
道端にテナントの店のバナナ売り
家いえの庭のヤシの木茂りをり
水上の土産屋に買ふアイスティー

佐藤稲子

眞田忠雄

灌水の音を吸ひ取る早苗床
放棄田に初よしきりの鳴きくらべ
永代橋注水捨つる競漕前
代掻きや鷺は田隅に立ち尽す
アンコールワットにでかき蟻の道
客土して幼稚園庭植田とす
余り苗を挿せばはやくも戦ぎけり

柴崎和男

夏掛を引き寄せてまた睡りけり
楡あを葉墓碑には「牧野富太郎」
夏落葉公方と毒婦眠りけり
そば清はけふ定休日梅雨明ける
蜜豆に黒蜜かける妻の留守
枇杷包む袋わづかに湿りをり
夏祓ひお守りふたつ買ひもとめ

日京祇 獺時西時
 の園祭ののの
 茶会の甘のな日
 屋いかづちの酒湯のぬの二
 夏の銚の舟の見舞代
 の炉の向のあ中の文目
 の辺のう茶の数へ歌
 御のあに東かかな
 札ぶに東かかな
 受り餅山
 け餅山

鈴木昌子

と昼夕青紅本ピ
 のさはは葉蜀堂ア
 曇がじめ風葵にノ
 りりめ杳鳥鳴よ
 蟻縁ぬ居く龍きジ
 は側ぎくぐれもズ
 二下石にばるガ
 列に先座に道梅飛
 にに猫り道真雨立
 坂に猫り道真雨立
 の地込入道寒夏
 道獄の声むぐしな

篠崎志津子

高橋均

山ほどの葉をもらふ夏の風邪
夏の夕塾に行く子と行かぬ子と
右腕に種痘のあととや衣更
茄子漬の酒は常温にて手酌
幼子の寝汗をぬぐふ夜更かな
そんなことどうでもよろし冷奴
炎昼の訃報二枚の揭示板

竹内文夫

ビール酌む同窓にまた不帰の客
床上げの便り認め新茶汲む
鏡見て耳朶の蚊をぴつと打つ
校庭に砂ぼこり立つ雲の峰
夏帽を斜はすに幼子兄となる
闇に浮くかに白ゆるる半夏草
弔ひの客絶えにけり夏座敷

屈託を溶かすか朝茶桜桃忌
ドガの絵や香水ほのと背を過る
玉音を昭和の音とラムネ飲む
雨の日は雨と戯る額の花
水打つて夕陽のかけら濡らしけり
短夜や海より明くる茅淳の里
端居して余生の余白はかりをり

塚本實(虚舟)

時田義勝

「子供の日」爺様たちは囲碁大会
茅花刈るエンジンの音の届きくる
余り苗四隅に置きし学習田
形代を近く川の流しけり
金色の鯉泳ぐ池あさざ咲く
新人の十キ口走や青嵐
炎昼の改築工事両隣

中島和子

竹落葉掃かずにおきて獸道
飲む酒を少し垂らして栄螺焼く
緋目高の交尾さかんや朝の鉢
曇る日の曇る明るさ沙羅咲けり
八方に鉄砲を向け百合咲けり
右の手の指くちやくちやに胡瓜もむ
日の盛り定刻過ぎしバスを待つ

贄田俊之

よつこらしよと腰掛けにけり竹床几
見下ろせば光る代田は木々の間に
二坪の菜園孫とイチゴ狩り
大気圏抜ける勢ひ今年竹
汗拭ふ客待ちの車夫雷門
呉れてやる高きところの熟し枇杷
ちびちびと梅酒あ頃のあんこと